

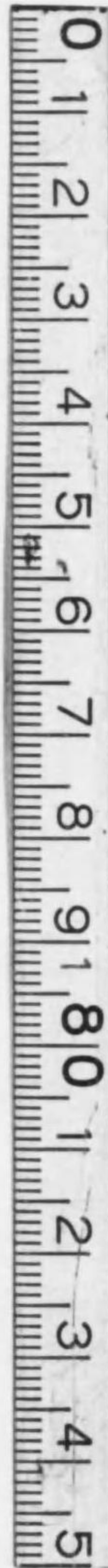
101

特252

226

文學博士 山田孝雄述

國體の淵源を教ふる國生の物語

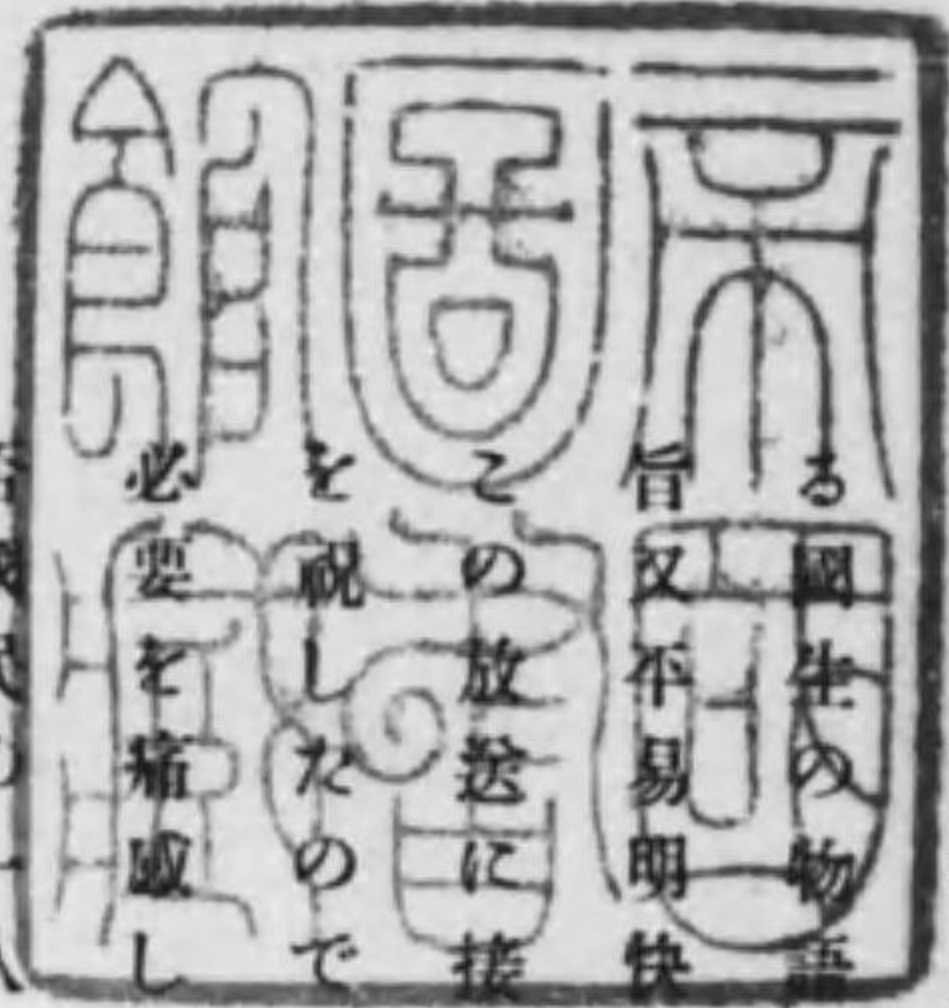


始





特 252  
226



一般國民の國體に關する認識が充分でない事をつねづね遺憾に思ひ、國體觀念を養成するに足る資料方法もがなと考へてゐたのであるが、七月三十日夜中央放送局仙臺支局より放送せられた山田孝雄先生の「國體の淵源を教ふる國生の物語」と題する講演は、國體の尊嚴なる所以を説いてあます所なく、論旨又平易明快にして、何人にも理解せられた事であらうと感じたのであつた。この放送に接して感激に堪へず、直ちに仙臺なる先生の許に赴いてその成功を祝したのであつたが、更にこの講演の趣旨を活字に附して一層廣く弘める必要を痛感したので、先生の御快諾を得てここに印行し、一人でも多くの人に、否國民の一人も残さずすべての人に、この先生の講話を理解して戴きたい念願を以てこの小冊子を世に送る。先生の放送を聞かれなかつた人々は、この小冊子によつて、國體の尊き所以をしつかりと把握して戴きたい事勿論であるが、すでにラヂオによつて講演を聞かれた人々も、この小冊子を熟讀玩味し





て、その理解を一層深められたく思ふ次第である。

昭和十年八月 日

七 條 愷



### 國體の淵源を教ふる國生の物語

山 田 孝 雄

ここに國生の物語と申しますのは、御存じのやうに、わが國のはじまりを説く物語として、わが國の古典すべてに通じて傳へられてある物語であります。この物語がわが國家のはじめとなつてゐるのであります。それ故に、この國生の物語についての理解の如何といふことが、わが國の人心に絶大な關係を有するものであります。その理解のしかたが、現今までの思想上の諸の問題に微妙な關係を以て影響してゐると思ふのでありますが、私はここに私一己の考へ方を申し上げて、皆様の御批判を仰いでみようと思ひます。

さて、先づこの物語の大體を申し上げておきます。これは古事記と日本書紀とに



よつて多少傳への違ひもありますが、大綱はかはりませぬ。それらを最も簡明に申しますと、

夫開闢之初伊弉諾伊弉冉二神共爲夫婦生大八洲國及山川草木次生日神月神云々(古語拾遺)

となるのであります。ここに大八洲國とありますのは、日本書紀と古事記によつて傳へが多少違ひますが、古事記によりますと、淡道之穗之狹別嶋(淡路島のこと)伊豫之二名島(四國のこと)隱伎之三子嶋(隱岐島のこと)筑紫嶋(九州のこと)伊岐嶋(壹岐島のこと)津嶋(對島のこと)佐度嶋(佐渡島のこと)それから大倭豊秋津嶋(本州)でありまして、この八の島が先づ生れたによつて大八洲國といふのだと古事記に明記してあります。しかし、その外に吉備兒嶋(今の岡山縣の兒島半島)小豆嶋(讃岐の小豆島)大嶋(周防の大島か平戸の北にある大島か)女嶋(大分縣の姫島か玄海灘の姫島か)知訶嶋(平戸島及五島列島)兩兒嶋(未詳)を生みた

まふとありまして、すべて十四の島が伊弉諾伊弉冉二神の所生であるとあります。これは要するに、當時のわが國土全體をさしたのでありませう。さてその次に古事記によれば「既生國竟更生神」とありまして、山海川草木等の神を生みたまうたのであります。これらの神々が所謂八百萬神の源となられた神々と思はれます。それは要するに、今のことばで申しますれば、國民の祖神であつて、當時の國民の代表者としてあげられたものであらうと考へます。さうして最後に天照大御神をお生みになられたのであります。その事をば日本書紀には

伊弉諾尊伊弉冉尊共議曰吾已生大八洲國及山川草木何不生天下之主者歟於是共生日神號大日靈貴

と記してあります。この神の御生れ遊ばされた際の事を古事記には伊弉諾尊が黄泉國に赴かれた爲にうけられた御身の穢を禊祓をして清められました。その禊祓が終つてその最初にあらはれたまうたあります。この點がまた甚だ重大な事を物語つ



てゐると思ひますから、この點を御忘れないやうにしておいていただきたいのであります。

以上は所謂國生の物語の極大略の大筋だけを申したのですが、この物語は何を吾々に教へてゐるか皆様の御一考を願ふ次第であります。この物語は、若しこれを我々人間の上の事にあてて申す時には、甚だ不思議な事でありまして、若し人間の上の事とすると、人間が國土を生むといふ事はあり得べからぬ事であるといはねばなりません。もとより神様ですからさやうな事も遊ばされようとは思はれますが、しかし、外國人だとか、外國人の思想に沈没してしまつてゐるやうな人からは、恐らくは、迷信だとか、荒唐不稽なてならめだとか、善意にとつてお伽話だとかいふ位にしか考へられてゐないので無いかと思はれます。私はこの物語こそわが國家の眞實に貴い事を告げに教と思ひまして、これがあつてこそ神國の神國たる所以を知り得るのであるし、わが國體の神聖なる所以、わが國民精神の崇高なる所以や、

國民道德の貴い理由も一切これによるものであると思ふのであります。若しこの國生の物語を、前申しますやうにつまらぬ話だと考へてゐる人があるとすると、さやうな人が如何に表面で國體の偉大なことを説いてゐても、その内心には國家のはじまりに對して一種の疑惑とか輕蔑とかをもつてゐるわけでありますから、どうして他の人を心服せしめることが出来ませうか。私はさやうな表と裏とのある人間の國體讚美の言論こそ、かへつて國を害するものであらうと思ふのであります。

さて前置は先づこの位に致しておきまして、これからこの國生物語が何を我々に教へるかといふことを説明して見ようと思ひます。この物語は第一にわが國家は生れた國であつて作られた國では無いといふことを教へるものであります。わが國のことばでは「作る」といふのは、本來何もなかつたものがあるやうにすることをいふのでは有りませぬ。「作る」といふのは、元來ある物に人工を加へて、或る目的に



よつて、別の物とすることをいふのであります。木で箱をつくるとか、米で酒をつくるとか、金で刀をつくるとかいふやうに、その原料が少くも天然的に存するのであつて、これに人力を加へて或る物とすることが「作る」といふことであります。これは米を作る、大根を作るといふ場合も同じであります。米や大根は全く人の力で作ったもののやうに思はれやすいけれど、その米や大根の種子が無ければ出来ない事であります。そこで「作る」といふことは、どこまでも、原料は天然にあつても、それに人力を加ふるによるものであるといふことは疑が無い。わが國は神の生みたまうた國であるといふことは、作られた國で無いといふことを示してゐるものであります。もつともわが國でも國を作つたといふことばもあります。それは大國主神がこの日本國を經營してこの國を立派にせられましたから「國作大己貴命」とも稱へ奉つたのであります。しかし、この國を作るといふのは病氣をなほしたといふやうな意味であります。古事記に、大國主神が兄弟の八十神に悪まれて、大

きな石を眞赤に焼いたのを抱かせられて一旦死なれたのを、御祖の神様が歎かれて神産日神かみむすひのかみに御願になつて、その御教によつて治療した所完全になほられたとありますが、その時の事を古事記に「令作活レムツクイカ」とあります。この「作る」は治療することであることは少しも疑がありません。そこで人體についていふならば、人を生むのは親であります。人をつくるのは、人を修繕するのは、醫者であるといふことになります。これが「作る」と「生む」との違いであります。

かやうであるから、わが國は作つた國でない、生れた國であります。生れた國であるから、國のはじまりをたづねたづねて溯れば、その親たる神様に歸着してしまふのであります。それ故に、國を作つたとか、國を建てたとかといふ事は、わが國史には昔から無いことであります。今日國を建てたとか建國とか云ふことを時々ききますが、これはわが國體の神聖を知らない人のいふことであつて、私には甚だけがらはしく聞えるのであります。さてかやうに、わが國は神の生みたまうた國であ



るから神國であるといふのは明かな事であります。それ故に「大日本は神國也」といふあの神皇正統記にいふ所の信念は、國の生れはじめから存したものとといふことがわかります。これが國生の物語の教へる所の第一の點であります。

さて次に「神の生みたまうた國」といふ事は何を語るかを考へてみませう。俗に瓜の蔓に茄子は生らぬとも申しますし、蛙の子はやはり蛙だとも申します。神の生みたまうた子はやはり神でなければなりません。よしんば、現實は神と見えなくても神の子たるものに神の本質のやどらぬといふ事はありますまい。かくの如くにしてわれわれ日本人はすべて神の子であり、同時に神になり得るものであります。これが神道の根源となる思想であります。神道の眞髓は、神様にわれわれ日本人が絶對的に信賴してゐることとあります。それは神が親であり、人がその神の子であるといふ信念から生ずることとあります。親子の間は相互に絶對的に信賴しあふこと

を本質と致します。古代に出來た祝詞をよんでみますと、感謝といふことだけで、祈り願ふといふ事が無いのであります。又古から傳へられてあることには、伊勢太神宮にお参りするに「祈る」といふことがあつてはならぬ「祈る」といふことは神を汚すものといはれてあります。即ち心に祈る處なきを内清淨といふといふことが坂士佛といふ人の太神宮參詣記に記してあります。即ち古い歌に

心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神やまもらむ

とあるのは、この精神をうたつたものであります。この歌は、歌としてはさほど上手な歌とはいはれませんが、神道の眞髓をあらはしてゐることは疑がありません。かやうに、祈らずして神が守るといふのと、感謝だけしてゐるといふのとを合せて考へて見ても、親子の間の關係に同じいといふことがわかります。親子の間では一々お願ひしなくても親は必ず子を守るものであり、子はたゞ感謝してよく親に事へればそれでよいわけであります。これが神道に於ける神と人との關係であります。



次に同じく神道にはお祭といふことがあります。これは人が神に對し奉つて感謝の誠を表はす爲にするわざをいふのであります。このお祭には必ず祓をする。祓をするのは罪穢を祓ふのでありますが、何故に祓をせねばならぬかといふに、罪穢があつては神に近づけないのみならず、神が、その祭を享けられないからであります。然らば祓をすると、どうしてお祭りを神がおうけになるかといふに、それは祓をした結果、人の清淨潔白な本質があらはれるから、神が之に感應せらるゝ故であります。この感應といふことは、箏や三絃の絃でも説明することが出来ます。同じ調子に調べた二本の絃は一方を鳴せば他は自然にそれに共鳴するものであります。これと同じわけで、われわれ人間の本質は本來神と同じいものであるから、その本質を十分に發揮すれば神様が共鳴せられるといふ譯と思ひます。祓はもとより神をけがし奉るまいとするのでもありますが、その奥にかやうな精神があるのであると思ひます。かやうに、われわれ日本人は神の子で、その本質は神に同じいといふ思想

が神道の根源と思ひますが、これも國生の物語にその源を發してゐるものでありますから、これを國生の物語の教へる所の第二の點であるとしませう。

次にこの國生の物語がわれわれに教へる所は、この國土とこの國民とこの主権者との三者が國家の根本をなす要素であるといふことと、その三の要素がしつくり融合して一體となつてゐるものであるといふこととであります。それは大八洲國といふこの國土と、國民たる海川野山草木の八百萬神と、主権者たる天照大御神と、この三者が血統的に一團となつてはじめて日本國家そのものの實體が完成してゐるといふことを教へてゐるといふのが、この國生の物語であるのであります。國家はこの三要素から成立するものであるといふさういふ意識がないならば、何も、このやうな物語の生ずる道理が無いのであります。さうしてこの事實の認識の古くから在つた事は、俗にいふ古事記の序文、即ち古事記を上る表文の文句の上からも、明白に



認識し得るものであります。さうすると、このわが國生物語は一種の憲法大意であり國家原論であると云つても強言では無いのであります。かやうな貴い教が、千二三年前に編纂した書にあるといふことは、驚くべきことといはねばならないと思ひますが、しかもそれは古くから傳つた教をこの時に記したものであつて、その教の古さといふものは、はかり知ることの出来ない古代から在つたものであります。今日國體の明徴とか何とかやかましくいはれてゐますが、この國生の物語は、その國體の淵源を教へてゐるのではありませぬか。これを荒唐不稽な夢物語だとか、お伽話だとか片づけておいてどうしてほんとの國體の認識が出来るものでせうか。これが國生の物語の教へる第三の點であります。

次にこの國生の物語が、われわれに教ふる所は、われわれの國土とわれわれ國民と恐れ多くもわが皇室とが、いづれも伊弉諾伊弉冉二柱の神のお生み遊ばされた

ところであるといふのでありますが、これはこの三者が切つても切れない血縁によつてつながり結びついてゐるといふことを教へるものであります。即ちこの三者は同じ親から生れた兄弟の關係にあるといふことを告げるものであります。これは非常に深い意味のあることでありまして、近頃血族國家といふことを申しますのがそれでありますが、さういふことばでいふよりも、同じ親から生れた兄弟であるといつた方が遙かに親しい感じもしますし、又われわれの胸にしつくりとこたへるではありませぬか。このやうに切つて切れない血のつながりをもつてゐるといふことはこれがわが國體の一特色でありまして、また忠孝が一であるといふ國民道德の一大特色がここから生ずるのであります。而してこの忠孝一本のこの國民道德のその根本的中心になつてゐるのは、血族的の愛の精神であります。この血族的の愛といふものは各自の血の中に生きて活動してゐる精神の力でありまして、われわれ日本人が生きてゐる限り必ず存するものであります。われわれ日本人が天皇の御爲、皇室



の御爲、國家の爲に、いざとなると我身を忘れ我家を忘れるのは、この血族愛の根本精神の自發的の活動によるのであつて、理窟を考へるとか學問によるとかいふやうな事に基づくものではありません。これは實にわれわれの血、われわれの心の眞底に存する根本の力の發動によるものであります。そのわれわれの血、われわれの心の源が一切みな伊弉諾命伊弉冉命に基づくといふその意識が、如何にわれわれの國家的結合、國家的活動の基礎を強固にしてゐるかを考へてみると、この國生の物語の貴さがわかるのであります。それ故にこの國生の物語は國體の淵源と同時に國民道德の根本を教へてゐるものであるといふことは明かであります。これがこの國生の物語の教へる第四の點であります。

次にこの國生の物語が如何なる事を我々に教へてゐるかと考へまするに、この國土とわれわれ國民とが兄弟の關係にあるといふのであります。即ちわれわれの住む

この國土とわれわれの身體との間には血のつながりが有るといふことを教へてゐるのであります。これは深く考へない人々にはそれこそ荒唐不稽な話、お伽話のやうな話と考へられてゐるのでは無いかと思はれますが、私は反對に、これこそ世界無比の尊い教であると思ふのであります。國土と國民とは私から見ますれば、明白に血のつながりがあります。この事については私は先づ「くに」(國)といふことから説明しておかねばならぬと考へます。「くに」といふことについては種々の説明がありますが、要するに地球の表面たる土地についていふものであることは疑ふべくもありません。しかしながら、土地がすべて「くに」ではない、「くに」といふものはそこに人間の生活が營まれてゐるといふことを條件とすることは明かであります。即ち人が生活を營んでゐる地域を「くに」といふことは疑が無いと思ひます。そこで、その國土と人との關係を見ますれば、どういふ事を見るでせうか。先づわれわれが最初親から生れた時の事を想像して見ませう。そのはじめは極めて小さい身體で



ありまして、又軟弱なものであつたに相違ない。それが親と君と神との恵によつて今日このやうに生長してまゐつたのでありますが、この身體を組織してゐるわれわれの血、われわれの肉、これは親の與へてくれたそのまゝのものではなくして、今日かやうにまで生長して來たのは、血や肉やが内部に多量に生じてふとつた結果であります。もとよりその血や肉やをかやうにとり入れてふとつたのは親の與へた生命の力に基づいてあります。しかし、その血や肉やは何から生じたのであるかといふに、それは一切飲食物から生じたといはねばなりません。若し、人間に飲食物を與へなかつたら、どうして我々の現在のこの身體があらませうか。かやうに考へてきますと、われわれの血と肉との最大部分はその源を飲食物に得てゐるのでありますし、又飲食物を絶つ時には生命もなくなるのでありますから、われわれの生命も亦その源を飲食物に得てゐるものだともいひうるであります。それ故に人間は飲食物に對して多大の感謝と尊敬とを捧げなければならぬものであります。

さてかやうにして飲食物とわれわれの血や肉との關係を考へてみますと、國土とわれわれとの間に血のつながりのあることは極めて明白であります。われわれの毎日飲む水、毎日頂く米、野菜その他野山海川からとれる魚や貝の類に至るまで、すべてこれ國土の産物であると同時に、われわれの血肉の源であります。われわれとこの國土との間に血のつながりのあることは明かであります。これらの事を考へてみればわれわれの血肉はこの國土の産物の變形したものと云つても差支ないのであります。なほこれは血肉などの肉體上の事だけではない。われわれの智識われわれの感情の源といふものも、これ亦われわれの生れ育つた國土の森羅萬象から受け入れた智識や感情が、その基をなしてゐるものであります。かやうに考へてくると、われわれとわれわれの生れ育つた國土との間には、實際きつてきれない血のつながり、心のつながりがあるといふことは、一點の疑もなくなります。われわれの愛國心はその郷土愛に基づくものであるとよく人々のいふ所でありましたが、今私が申し



ましたやうに、われわれの血や肉やがこの國土から與へられたものであるといふことを考へて見れば、郷土愛といふものも亦人間に固有する自然の力の作用であつて、抑へても抑へきれないものであるといふことがわかります。わが國生の物語はかやうな教がわが國の太古から行はれてゐたことを、われわれに告ぐるものであります。かやうな教は世界無比の尊い教であります。この教に似たものが、佛教に四恩の一としていふ國土の恩であります。これも尊い教であります。しかし、その「恩」といふ語が他人行儀の水くさい感じを我々に與へます。われわれはわれわれの國土と兄弟であり、血族であるとわかつてみれば、互に助けつ助けられつするのは當前のことであつて今更、恩の何のといふべき間柄でも無いといふ事になります。さうしてわれわれはこの國土に無限に愛をさへげ、この國土はわれわれを無限に愛してくれます。それ故に感謝もしなければならず、恩を忘れてはならぬが、恩の何のといふのは水くさくさもあり、又話が小さいと思ふのであります。この精神がわかつ

てくると、愛國心も郷土愛もみな人間の本質に具つてゐるもので、理窟や感情やの所産ではないといふことがわかるのであります。これがこの國生物語の教へてくれる第五の點であります。

最後にこの國生の物語について申し上げておきたいことは、天照大神の御出現の事であります。これはわが國家の主權の本質についての教であると思ひます。御存じの如く伊弉諾尊が黄泉國にお出でになりました。御身に汚れをお受けになりましたが、この國にお歸りになつて直ちに禊ミソギをしてその汚を祓はれました。その結果、心身共に清淨潔白の本質をあらはされました。その最も清淨におなりなされたその最初にお生れになつたのが、天照大御神であらせられます。このことは何をわれわれに教へるか。わが國の主權者たる天皇の御位といふものが清淨潔白、一點の汚れもない神聖無比なものであるといふことを教へてゐるのであると思ひます。われわれ



れはこの神聖無比な天皇をいただいてあるといふことを、われわれに教へてあるものであります。これが國生の物語の教へる第六の點であります。

以上私はわが國生の物語がわれわれに教へる所の主な點を申してみたのですが、それはこれだけに限るといふのではありませぬ。しかし、今お話し申し上げただけでも、この國生の物語は極めて重大な事ばかりを教へてくれるものであるといふことがわかりませう。わが國體、わが神道、わが國體精神、わが國民道德といふものが、すべてこの物語を源として生じてくるのでありますし、又これによつてわが國の古から國家の三要素及びその結成についての明白な意識を有してゐたといふこと、國土と國民との間に如何に深い關係を保つてゐるものであるかといふ世界に比類の無い尊い教、又國家の主權が純潔神聖なものであるといふことを教へてゐるのであります。それ故にすべての古典はみなこの國生の物語を以てわが國のはじめと

してゐるのであります。即ちこの國生物語がわが國の歴史の第一歩となつてゐるのであります。それ故にこの國生物語の正當な理解が國體の認識の第一歩であります。これに正當な理解が無いならば、爾下一切の事は正當な理解を導き得るか否か甚だ覺束ない事と思ふのであります。

以上、不行届ながら、私一己の考へを申し上げて、皆様の御批判を仰ぐ次第であります。(昭和十年七月卅日中央放送局の依頼により放送せるものの原稿)

#### 附言

本講演のうちには私の従前の考について自ら批判してゐる點もあります。それは私の考が未だ到らなかつたのでありますからそれらの點は私の現在に於いてはここにいふ所を正しいとしてゐるといふ事にお認めを願ひます。

#### 國體の淵源を教ふる國生の物語(終)



368  
170

昭和十年八月廿一日印刷  
昭和十年九月七日發行

(國生の物語集附)  
定價 金拾錢

著 作 者 山 田 孝 雄

發 行 兼 印 刷 所 七 條 正 義

東 陽 印 刷 所

發 行 所 西 東 書 房

東京市神田區  
北廣町五番地



終

